

大学生らが東日本大震災で起きたことに向き合う通年講座「311」は伝える／備える」次世代塾」が16日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。テーマは

第8回講座

「ボランティアの力」。津波で被災した若林区東部で農業復興による地域支援に取り組む学生グループ「リ

ルート」代表の広瀬剛史さん(43)と津波に襲われた民家の泥かきに汗を流した元「スコップ団」団長(現「青空応援団」団長)の平了さん(39)の体験談を聞いた。



一般社団法人「リルート」代表

広瀬 剛史さん(43)

復興へ媒介役果たす

震災直後のボランティア経験で行政には「上から目線」、民間には「自分優先目線」があり、被災した当事者の視点が欠けていると感じた。相手の立場に立つて、必要とされることに自分たちで取り組もうと2011年4月に「リルート」を発足させた。

農地ががれきだらけになつた若林区東部を活動エリアとし、復旧から復興、さらには地域おこしに向けた長期的支援をしようと活動

津波被災地でがれき撤去に励むボランティア。畑作再開の支障にならないように、小さなガラス片や石ころも丁寧に取り除いた。2012年3月、仙台市若林区藤塚リルート提供



震災直後のボランティアを始めた。まずは田畑に埋まつたがれきの撤去に着手し、累計約3万人のボランティアを全国から受け入れて農地復旧を進めた。

の販売や市民農園の運営、「わらアート」なども行つた元「スコップ団」団長

平

了さん(39)

「いい普段」積み重ね

震災直後は何をしていたか分からず、まずは現場の要望を聞くことに努めた。ご遺体の腐敗を防ぐため、安置所にドライアイスが必

要と聞いて動くと、ネット上で「消臭剤を使えば」などと言われた。自分の家族が亡くなったら使うだろうか。「人の心も分からな

受講生の声

自分の活動確認

震災から6年半以上がたった今なお、連日早朝から活動しているリルートは素直にすごいと思いました。自分が関わっているボランティア活動は本当に支援に

なっているのか、自己満足に終わっていないかも考えさせられました。

(岩沼市・尚絅学院大3年 大3年・21歳)



沼田誠史さん

相手考えて支援

自分のやりたいことをするのではなく、相手の立場に立つて行動するのが真の支援者だと学びました。地元いわき市で原発事故の恐怖を経験し、今も検診を受けている身としてはこっそり考えさせられる講話でした。

(仙台市青葉区・東北福祉大3年・21歳)



大谷麻綺さん

日常の行動大事

誰も気付かないような二一ズに伝えるため見返りもないのに行動し続けた講師の話に、人助けに理由はいらないのだと学びました。平時にできないことは有事もできない。普段から考えて行動したいです。

(宮城県大河原町・東北学院大3年・21歳)



島貫恵汰さん

2軒をきれいにできた。「やったことがない」と「できない」を一緒にたいてはいけない。普段、身近な人に親切にできていないのに、災害時だけボランティアになるのもおかしい。まずは「いい普段」の積み重ね。そうして仲間ができればいざという時、一人ではできないことができる。

メモ 「次世代塾」は、河北新報社などが震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指して企画した年15回の無料講座。次回は10月14日。連絡先は同社防災・教室室＝メール jisedai@po.kahoku.co.jp

運営する311次世代塾推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構